CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Tsukuba Repository

村松 剛先生略歴・著書目録（村松剛先生退官記念号）

雑誌名	文学研究論集
号	9
ページ	i-iv
発行年	1992-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2241/14094

村松 剛先生略歴・著書目録

略　歴

昭和4年3月23日	東京に生まれる。家は江戸時代いらい代々医科。東京高等師範学校付属小，中学校を経て第一高等学校理科を卒業。
29年3月	東京大学文学部仏語仏文学科卒業。
〃 4月	同大学院に入学。
〃 9月	神奈川県大学非常勤講師に就任。
30年4月	国学院大学非常勤講師を兼任。
31年3月	東京大学文学部大学院修士課程を修了。文学修士。
〃 4月	同博士課程にひきつづき在籍。
〃 4月	立教大学一般教育部非常勤講師に就任。
〃 7月	神奈川大学非常勤講師を辞任。
32年3月	国学院大学非常勤講師を辞任。
34年3月	東京大学文学部大学院博士課程を修了。
〃 4月	立教大学一般教育部専任講師
36年3月	毎日新聞社臨時特派員としてイスラエル，ヨーロッパに赴く。5月に帰国。
〃 4月	日本ペン・クラブ理事となる。
37年2月	産経新聞社臨時特派員として北アフリカに赴く。3月帰国。
〃 4月	立教大学一般教育部助教授。
38年2月	アジア財団の招きで東南アジアを振出しにアジア諸国，中東を歴訪。4月帰国
40年7月	読売新聞社の臨時特派員としてアルジェリアに行く。
〃 10月	ニューヨーク・ジャパン・ソサイアティーの招きでアメリカ，ヨーロッパに赴く。アメリカではハーヴァード大学研究生となる。
41年5月	帰国。
42年4月	立教大学文学部に移籍。助教授。
〃 5月	リーダース・ダイジェスト社のアジア局編集局長への就任を求められたが固辞し，同社編集顧問となる。
43年2月	インドネシア政府の招きでインドネシアに行く。

43年10月	スペイン政府の招きで同国を訪問。その帰途イスラエル政府の招きで同国を訪問。
44年４月	立教大学文学部教授に就任。
〃 ７月	立教大学を辞任。
〃 ９月	京都産業大学非常勤講師となる。
45年３月	リーダース・ダイジェスト社顧問を辞任。
〃 ４月	京都産業大学教授に就任。
46年２月	カナダ・トロント大学の招きで同大学客員教授となる。講義は一学期間。
47年４月	日本文芸家協会理事となる。
48年４月	拓殖大学非常勤講師となる。（三年間）
49年２月	国際交流基金の依頼でブラジルに行き，リオ・デ・ジャネイロ，サンパウロ大学で講演。
〃 ８月	筑波大学教授（文芸・言語学系）に就任。京都産業大学教授は辞任し，非常勤講師となる。
50年４月	日本ペン・クラブ常務理事となる。
〃 ９月	外務省の依頼でオランダ，アルンヘムの日本研究会議に出席。ハーグ，ブリュッセル，パリ，リヨンで講義。
51年10月	ロンドンの国際ペン会議に出席。
52年３月	日本ペン・クラブ常務理事を辞任。ペン・クラブを退会。
57年11月	フランス政府よりパルム・アカデミック勲章オフィシエ級を授けられる。
59年３月	京都産業大学非常勤講師を辞任。
平成３年８月	南アフリカ政府の招きによって同国を訪問。

著書目録

「向陵時報」という一高の刊行物に論文を載せたのが，評論を発表した最初でした。「世代」という雑誌に文芸評論を二つばかり書き，それが一部のひとの目にとまって，昭和28，９年のころから，少しずつ発表の舞台があたえられました。遠藤周作，服部達と一緒に，昭和30年に「メタフィジック批評」という副題の文章を「文学界」に連載しました。当時は大学院の学生の身分のまま大学の講師をつとめていましたから，極度に忙しい生活でした。

昭和36年からあとは国際政治，ことに中東についても書くようになったために，

著作の分野は多岐にわたっています。単行本は編著を入れると四十点，ほかに訳書が七点と思います。共著，共訳，共編は，数えてみたこともありません。明治以降の文芸作品を対象とした比較文学の本を，数年のうちには出したいと考えています。

モジリアニ肖像画	翻訳	紀伊国屋書店	昭和32年
死はわが職業	翻訳	講談社	昭和32年６月 （のちに角川文庫）
二十世紀文学の決算	翻訳	紀伊国屋書店	昭和33年７月
芸術批評	翻訳	白水社（ク・セ・ジュ文庫）	昭和34年11月
大量殺人の思想		文芸春秋社	昭和36年12月
ナチズムとユダヤ人		角川書店（角川文庫）	昭和37年６月
アルジェリア戦線従軍記		中央公論社	昭和37年８月
文学と詩精神		南北社	昭和38年１月
ユダヤ人		中央公論社（中公新書）	昭和38年12月
女性的時代を排す		文芸春秋社	昭和38年12月
古代の光を求めて		角川書店（角川新書）	昭和39年２月
テレーズ・デスケルウ	翻訳	角川書店（角川文庫）	昭和39年３月
教養としてのキリスト教		講談社（講談社現代新書）	昭和40年３月
日本への回帰		番町書房	昭和40年10月
ユダと美神		講談社	昭和41年９月
アメリカの憂鬱		読売新聞社	昭和42年２月
ド・ゴール		講談社（講談社現代新書）	昭和42年２月
ジャンヌ・ダルク		中央公論社（中公新書）	昭和42年８月
戦後の神話		日本教文社	昭和43年５月
評伝ポール・ヴァレリー		筑摩書房	昭和43年６月
キリストは死んだか	翻訳	タイムライフ Intl	昭和44年５月
歴史とエロス		新潮社	昭和45年９月
動乱のヒーロー		日新報道	昭和46年２月
三島由紀夫－その生と死－		文芸春秋社	昭和46年５月
評伝アンドレ・マルロオ		新潮社	昭和47年６月 （のちに中公文庫）
三匹目の子豚		日本交通公社	昭和47年６月
中東戦記		文芸春秋社	昭和47年８月
おおエルサレム　上・下	翻訳	早川書房	昭和49年８月

			（のちに早川文庫）
渇愛の時代　－高田好胤氏との対談－		読売新聞社	昭和49年10月
			（のちに角川文庫）
現代おんな大学		浪漫社	昭和49年10月
死の日本文学史		新潮社	昭和50年５月
		（のちに角川文庫）第４回平林たい子賞受賞	
日本近代の詩人たち		サンリオ出版	昭和50年８月
私の「正論」		日本教文社	昭和51年６月
察しあいの世界		プレジデント社	昭和52年６月
帝王後醍醐		中央公論社	昭和53年６月
			（のちに中公文庫）
国際テロの時代	編	高木書房	昭和53年７月
日本文化を考える	対談集	日本教文社	昭和54年５月
歴史に学ぶ		日本教文社	昭和56年10月
中東の地政学	編	ABC 出版	昭和57年４月
血と砂と祈り		日本工業新聞社	昭和58年７月
－中東の現代史－			（のちに中公文庫）
宰相の系譜	監修	廣済堂出版	昭和58年12月
アンドレ・マルロオとその時代		角川書店	昭和60年２月
豊かな社会の相続人たち		日本教文社	昭和60年４月
一つの時代の終りに		日本教文社	昭和61年１月
－勝田吉太郎氏との対談－			
醒めた炎　上・下		中央公論社	昭和62年７月
		（のちに中公文庫）第三十五回菊地寛賞受賞	
三島由紀夫の世界		新潮社	平成２年９月
日本を国家と呼べるか		PHP	平成３年５月